

故兒玉實用先生を偲んで

杉浦利之

(昭和28年 大学文学部英文科卒)

同志社タイムズ紙上に坂本完春文学部教授の「¹ 兒玉實用先生を悼む」という一文が既にあり、實用先生のご経歴やご業績、同志社へのご貢献については殆ど余すところ無く触れられている。従って私は、不肖の一弟子の視点で見、感じた、主に教壇以外での先生のお人柄を回想し、偲び草とさせていただく。

終戦四年後入学の我々にとって先生は四十歳代でありながらU先生と共に最も高みにおられる存在であった。両先生共可愛がって下さったが、U先生の前ではその威厳に自分の非力を意識し身が竦んだ。兒玉先生は怖くなくかつた。特に私の場合、中学時代に学徒動員の寮生活中に父を亡くして、そのため精神的に不安定な時期もあつたりして、学力が劣っていたが、そんな出来の悪い私にも、優秀な同輩、才媛達³に対すると同様目を掛けて下さった。時として縫りつきたくなる慈父の愛を感じた。ラムの随筆⁵の講読は先生が筆者であるような錯覚をおぼえるほど素晴らしかった。卒論に向けての途中の研究成果を輪番で発表する『英詩ゼミ』⁶は、終れば先生の音頭で決まってコンパに移行した。多くは先生のお宅の書齋で行われ、奥様に歓待していただ

いた。これで発表の苦しみは吹っ切れ、実に楽しい思い出となるのだつた。私達のゼミコンは卒業後も続き、傘壽を迎えられる年には兒玉邸でやらせていただいた。平成三年には下鴨で全員出席してお迎えし、喜んで戴き、あと、美味しいエスプレッソを、と先生が皆を宝ヶ池のホテルへ連れて下さった。

先生は殆どあらゆるものに興味を示され、そこから吸収される感性や知識が、英文学というご専門の枠を越えた、詩人としての先生の土台になっていたと思う。ご長女、晃美様がショパンの遺作のワルツを練習され、発表会が迫った時、名手コルトーの演奏を参考にと、当方のレコードを連れだつて聞きにみえた。梅岩の心学をお調べになった。ビダルのシャンソンほど綺麗なフランス語は知らない、と申し上げ、そのカセットをお持ちすると奥様と楽しんで下さった。E・シットウエルの詩の朗詠にウォルトンが曲を付けた作品を録音しお持ちした時も喜んで下さった。私も大いに先生のご趣味の感化を受け、観葉植物や焼物やお茶に首を突っ込んだが、車が好きなので奥様ご同伴で信楽へ、とか、酒饅頭なら〇屋へ、とか、方々へご一緒したものだ



● 兒玉實用氏略歴 ●

- 1905年 8月13日 生まれ
1930年 3月 同志社大学文学部卒業
1933年 3月 同志社大学大学院修了
1934年 4月 同志社専門学校講師
1939年 4月 同志社大学専門学校教授
1941年 4月 同志社大学予科教授
1948年 4月 同志社大学教養学部教授
同志社大学文学部教授 (兼任)
この間、予科長・教養学部長・文学部長・学長代理を歴任
1976年 3月 定年退職
1976年 4月 同志社大学名誉教授の称号を受く
1993年 8月 2日 5時13分 永眠 87歳

った。先生が中学生の時、その先生が實用先生の詩のノートを見て感心され、まともて下さったガリ版刷りの『角笛集』が生涯、詩と関わっていかれる原点であった由。同志社の予科¹¹入学早々から京都の中堅の文人達との交際が始まり、『兒玉笛磨』のペンネームでいろいろな同人誌に関係してこられた。その一つ『無名時代』の第2号に詩、第3号に堂々たる詩評を載せておられる。この時点でなんと弱冠廿三歳であられた。

さて、いつもお優しくお美しい奥様が昭和五十二年、お亡くなりになった。告別式での先生の哀惜のお言葉に、かくも相思相愛のご夫婦がよくも現実には在ったものよ、と深く胸を突かれた。以後、十六年余の間、先生があとを追われる日まで、お宅の一室の奥様のお写真の飾られた祭壇に、清らかな生花の絶えたことがなかった。ご令息、女子大学長の實英氏ご夫妻は道を隔てた北側にお住まいであるが、實用先生は、「二人はそれぞれ要職にある。足手纏いにはなりたくない。」と思われた。従って普段は、實英氏ご夫妻が夕べに見える他は、時折のご令嬢やそのお子達（お孫さん）と、週一、二度のお手伝いさんの来訪だけで、

基本的にお独りでお住まいになっていた。時々お邪魔した。「なんや君か。福家と君だけや。ひよっこり突然来よる。電話で都合聞いてから来るもんや。」——「ご予定がおありやったら出直します。」——「あるけどまあええ、早よ上がり。」といった具合であった。ある時ゼミからある物を進呈した。傘壽をお祝いする会¹²で披露されたのは恐縮した。「メシくらい自分で炊け、いうて、あるゼミが炊飯器をくれました。『コダマせんせにコガマ君』や、な、杉浦君。」——以後も、高校を退職してからは気ままな生活をしているので、老父を訪う気安さでよくお邪魔した。

昨年七月中旬にもこんな調子でお邪魔した。その時、私の車で智恩院へ連れて行ってくれぬかとおっしゃる。何えは勿論先生ご夫妻はクリスチャンだが奥様のご両親が智恩院に納まつておられる。ご当人が信仰しておられた仏式で菩提を弔うのが筋と思うので毎年七月廿一日に参詣しておられる由。快諾申し上げ、当日實英氏（公務のためすぐ退出されねばならなかったが）とお手伝いさんとで無事お供し終えた。帰路、お好きな鴨川べりの道を走った。白い鳥がいた。「ユリカモメか。」

とおっしゃった。その夜電話を下さり、「今日はほんまに有難う。お陰で気掛かりなことが一つ済んだ。また頼むで。」と力強い声でおっしゃったが、十二日後、奥様のもとへ旅立たれた。足腰が弱っておられたが頭脳は明晰だっただけに啞然とした。十一日先のお誕生日には實英氏はじめその妹様方、それぞれのご家族全員が集まって、米壽のお祝いをなさる御予定であったと聞く。ともあれ、今、天国の『グレイ・バーチの木陰』で奥様と一層仲睦まじく語らっておられることであらう。

接した者、一人ひとりの心に、温かい物をたくさん、ずっしり残して下さい、本当に有難うございました。

衷心より、慎んでご冥福をお祈り致します。

注

- 1 『同志社タイムス第472号・1993 (H・5) 年10月15日発行』。
- 2 1953 (S・28) 年大学卒業の英文学科生。

3 英文学科に急増した女性たちは皆センスよく、語学力が高かった。

4 文法の名著、Onions の 'An Advanced English Syntax' など、先生のお勧めがなければ精読などしなかったと、感謝している。

5 Charles Lamb の 'Essays of Elia'。中でも 'Dream Children : A Reverie' の講義は関連の挿話や脱線話も貴重で面白く、未だに懐かしく思い出す。

6 先生ご担当の『英詩ゼミ』のメンバーは9人であった。

7 それは奥様ご昇天の9年後の1986 (S・61) 年で3月8日に催した。

8 石田梅岩 (1685—1744) は京都の市井の学者。心学とは誠実、謙虚の大切を説いた彼の哲学をいう。拙宅は先代まで、その教えを経営理念に取入れた商家であった。

9 先生と親交のあった英国の高名な女流詩人。

10 英国最高の作曲家。

11 1925 (T・14) 年。

12 大学ご卒業の前年、1929 (S・4)

年6月創刊の、先生主宰の同人月刊誌。

創刊号の編輯後記に、「我々は先づ明確な現實把握から歩を進る積りで居る。雑誌を飾る者は従って我々の思想的官能的觸感に觸れた者の全てである。」とある。だが先生の筆ではない。余談乍ら私の父(先生と同期生)も同人の一人であった。当然年が経つにつれ、回数は増えたようである。

13 ゼミの親友。

14 1986 (S・61) 年8月26日 京都セリチュリーホテルで催された。

15 先生の詩集『哀歌』中に『ユリカモメの妻』という作品がある。これは奥様が亡くなる三日前にそれとも知らずお詠みになったものである。その最終節を転載させていただく。

16 「これからも年ごとに冬はくる／ユリカモメの群れもくるだろう／だが、ぼくはやっぱり／その群れを眺めながら／一生懸命 眼を皿にして／その中の一羽に妻の化身を探しつつ／この世をひとり／暮らして行かねばならないのだろうか」先生の詩集『グレイ・バーチの木陰』中

に、同じタイトルの一作があり、ご夫妻のなごやかなお語らいの情景が詠まれている。

筆者略歴・53 (S・28) 年同志社大学英文学科(兒玉先生英詩ゼミ) 卒。在学中、兒玉實英氏(現同志社女子大学長)主宰のピアノ同好会に在籍。卒業後2年間大学院在籍。以後、90 (H・2) 年定年まで公立高校教諭。

ダニエル・デフォー著 岩崎泰男訳

『十七世紀末の英国事情

―デフォーの社会改善計画―

原題 An Essay upon Projects

十七世紀末期のヨーロッパ諸国は相次ぐ戦乱に巻き込まれ、一般的に国家財政は危機に瀕し、莫大な国債を発行してそれに対応した。イングランドもその例外ではなかった。市民の間では富籤、賭博、あるいはいかかわしい投機的新事業を好む風潮が流行し、徐々にバブル経済を育む土壌が形成されつつあったのである。

一六九七年といえば本書が出版された年であるが、後年『ロビンソン・クルーソー漂流記』(一七一九)などの物語をものしたデフォーは対仏戦争中の危険な貿易投資やじゃこ猫飼育といった投機的新事業に手を出して失敗し、莫大な借財の返済不能のために投獄され、出獄して間もない頃であった。社会の表裏を知り、人生の辛酸を嘗め尽くした彼は結果的には商人としての信用を失い、文筆家に転向してゆくことになる。

デフォーは商人としての苦い経験を通じて、さまざまな制度的不備を痛感して、その改善をこの書の中で広く提言しているが、別な観点からみればうち続く内乱、

革命、対外戦争によって国家的基盤を揺るがせたイングランドの世紀末の現実をふまえて書かれた一種の歴史書でもある。

現在わが国はバブル経済崩壊後の不況対策として社会資本の充実、金融制度の健全化、福祉・教育制度の見直し、年金制度の改革、消費税問題等に真剣に取り組もうとしているが、これらは常に新しく古い問題なのである。既に三百年以前にデフォーによって述べられたこれらに関する独自の見解は、今読み返せば、温故知新的意義をもつであろう。

歴史家トレヴェリアンは「デフォーは古い世界を鋭い近代の眼を通して見た最初の人物だった」と語っているが、まさしくそれを実証する古典作品である。本書は今日よく耳にする「バブル」の語源となった「南海泡沬事件」(the South Sea Bubble, 1720)に至る歴史的風土とその前夜の様相を知る上でも興味深いものがある。

B6判二八〇頁
定価二、五〇〇円
発行・同志社大学出版部
取扱い・同志社収益事業課
(〇七五)一二五一―三〇三七・八

歴史家大下尚一先生との出会い

山田史郎

(アメリカ研究所助教授)

一流ホテルの宴会場で催す謝恩会などというものが、まだあまり一般的でなかった時代であった。卒業式の後、相国寺から上立売通りを東に少し行った所にある喫茶店「田舎亭」の奥の座敷に、ゼミ生がただなんとなく集まったのだが、そこに大下先生がいらっしまった。記憶はあまり確かではなくってしまっただが、何の違和感もなく学生の輪の中に先生がいたような気がする。

第一次オイルショックの直後で、ともに就職がきまっていた学生は数えるほどしかいなかった。高度経済成長は終わり、学園紛争も過去のものとなりつつある「シラケ」の時代を、私たちは生きねばならなかった。学生と教師の間には、どうにも越えられない壁があったような気がする。そんな中で、大下先生は不思議な教師であった。英書講読の授業が終わると、最後列にいた私たちのところへ歩み寄って、「君達、タバコ持っていないか?」と尋ねられる。夜中に、何の前触れもなく、突然ご自宅へ押しかけても、嫌がる様子もなく、お相手をしてくださる。ニューイングランド・ピューリタニズム研究の第一人者であることなど全く知らなかった。日本のアメリカ

カ学会の中心的存在であることも全く知らなかった。正直言って、先生の授業はよく分かるなかつたのである。なにか「含蓄」のあることを述べようとされているということには分かったが、勉強不足の僕たちにはそれを読み取ることができなかった。ただ、先生のキャラクターにひかれた学生のひとりとして、私はアメリカ史のゼミを選び、大学院に進むことになった。

大学院での勉強は、ある意味で、学部生の頃には分からなかつた、歴史家としての大下先生の「含蓄」を理解する過程であつたといえる。先生は同志社ではどちらかといえば「アメリカ研究者」として認知されていたように思われるが、私にとっては、まず第一に歴史家であつた。日本のアメリカ史研究では、二十世紀の政治・外交史が主流を占めてきたが、そのなかにあつて、思想史・文化史を専門とされる大下先生は異彩を放っていたといつても過言ではない。宗教から哲学までをカヴァーする先生の業績が、同志社の「文化史」の存在意義を日本の西洋史研究者に強く印象づける役割を演じてきたことは疑いようがない。



●大下尚一氏略歴●

1929年8月11日 生まれ
1953年3月 同志社大学文学部卒業
1956年3月 同志社大学大学院文学研究科修了
1969年4月 同志社大学文学部教授
この間、アメリカ研究所長・アーモスト館々長代理・宗教部長を歴任
1993年8月14日 15時42分 永眠 64歳

しかも、新しい概念や方法に絶えず注目される、柔軟な研究姿勢が、大下先生の神髄であった。私が大学院に進んだ一九七〇年代の後半は、日本史でも西洋史でも「新しい社会史」と呼ばれる潮流が学界で注目を浴び始めたところであった。伝統的な政治史や外交史や経済史とは違って、一般民衆の生活文化や心身・感情の動きを掘り起こそうとするアプローチは、新鮮であり、衝動的であった。私は、自分がやりたいのはこれだと思ひ、修士論文もこれで書こうと思つた。そして何よりも心強かつたのは、大下先生がこうしたアプローチの意義を積極的に評価してくださつたことである。夜遅く、祇園あたりで飲まれた帰りに、私の下宿に立ち寄られることが度々あつた。こたつに入りながら、新しい歴史研究の動向を大下先生にしては珍しく熱っぽくお話しになられたのを、鮮明に記憶している。

先生ご自身も、十七・十八世紀ピューリタニズムの思想史研究から出発されたが、思想が形成され、受容され、再形成される場としての社会の重要性に着眼された。人々が生きた家族やコミュニティに関するアメリカ社会史研究の成果を、ご自分の研究にすずんで取

り込まれた。フランス社会史の中核「アナール学派」が言う「マンタリテ（心性）」という言葉は、後にも先にも大下先生ただひとりである。普通の人々の意識や感情を見据えながら、文化や思想の形成過程を把握しようとした先生の研究姿勢に影響を受けたのは、私だけではない。大下先生と付き合ひの長かつた「弟子」たちが、やはり初期アメリカの文化史と社会史が交錯する領域において業績をあげているのも、偶然ではないだろう。

ご家庭や大学での先生のお姿を想いおこし、所属された教会でのお仲間との交わりを聞くにつれ、暖かい眼差しで研究対象に接し、過去の人々と対話をし、理解しようとした歴史家としての姿勢が、先生のお人柄そのものであつたのだということに、今になって気がついた。

故西村 晃先生を偲んで

清 川 義 友

(大学経済学部教授)

昨年暮れの十二月十八日に、同志社大学経済学部教授として多くの貢献をなされた西村晃先生が、五〇歳でお亡くなりになった。無事に新年をお迎えになることばかり思っていた私達にとつては、思いがけない訃報であった。

思い起こせば、私が西村先生に初めてお会いしたのは、大学院に入学して間もない頃である。当時はまだ明徳館に研究室があったが、ご挨拶に伺った折に、短時間ではあるが暖かな笑顔で話しかけて下さったのを覚えていゝる。その頃先生はまだお若く、助手(研究員)をなさっていたが、何もわからない私と同期の友人に向つて、「毎週一緒に研究会をしましょう」と誘つて下さった。そこでの勉強が、その後どれ程役に立ったかわからない。

主に取り上げられたのは、従来のワルラス的な均衡理論と異なる世界を開拓しようとする、「不均衡理論」の分野であった。クラウアーやパローの論文を読み進み、よくわからない箇所は丁寧に教えて下さった。終わつたら、すっかり日が暮れていた事も度々あった。

西村先生の主要な研究分野の一つは、この不均衡理論の領域であろう。ソロールステイ

グリッツやボレなど欧米の新しい研究を踏まえて、「不均衡における雇用調整と実質賃金率」と題されたご自分の研究成果を、理論・計量経済学会の秋の大会で発表された。その時、コメンターであった阪大の蠟山昌一先生が、「理論の展開部分については何も問題がないので、前提条件についてだけ質問させて頂く」と言われたという事を、後になつてお伺いした。

西村先生のもう一つの重要な研究分野は、インフレとフィリップス曲線に関するものである。恩師の中島先生のご紹介で、先生はわが国における近代経済学の大家である安井琢磨先生の下に、一年程勉強に通われたことがある。その折に安井先生からご自身の研究テーマについて尋ねられ、このテーマをお答えしたと話しておられた。フィリップス曲線の理論的基礎に関する先生の綿密なご研究は、まだわが国でこの分野の研究が少ない時期になされたものである。その頃、フィリップス曲線の計量分析で知られる神戸大の豊田利久先生が中島先生の研究会にお見えになつたりして、色々と学問的交流があつたようである。また研究会や大学院の授業などにお越し頂い



●西村 晃氏略歴●

- 1943年7月2日 生まれ
- 1966年3月 同志社大学経済学部卒業
- 1969年3月 同志社大学大学院経済学研究科修士課程
- 1971年3月 同志社大学大学院経済学研究科博士課程
- 1982年4月 同志社大学経済学部教授
- 1993年12月18日 0時51分 永眠

た、大阪府大におられた和田貞夫先生とは長らく親しくされており、学会の終わった後などを利用して、ご一緒によく旅行に行かれたりなさっていた。

その後西村先生は、学部の主任をなさったりして学校では多忙となられた。また一年間ご家族と一緒にカリフォルニア大学に留学され、ご帰国の際にはベナシーの授業内容などを聞かせて下さった。

ところで、このような研究面の他に、先生は教育面においても多くの優れた成果を残されている。誠実で温厚な先生のお人柄を慕って、多くの優秀な学生が西村ゼミに集まった。また当時まだお若かった為直接の指導はなさらなかったが、西村ゼミから大学院に進学して渡辺先生のご指導を受けた三名の全員が、現在では同志社大学などで教職に就いている。

趣味の面ではテニスやゴルフ等のスポーツを先生は愛好され、ゼミ合宿ではよくその腕前をゼミ生に披露されたようである。よく日焼けされ、いつも健康そうに見えた西村先生であるが、仕事に対しては人一倍強い責任感をもたれ、手を抜かれるという事がなく、ま

たいつも細かな心配りを絶やさなかった先生の真面目な性格が、いつの間にかお体に無理な負担をかけていたのではないだろうか。今から四年程前に、先生は急に体調を崩され、入院、そして手術をされた。長時間に及ぶ手術を無事乗り越えて、その後再び先生は、私達の前に元気なお姿を見せて下さった。しかし、次第に体力の衰えを感じておられたのであろう。「やりたい気持ちはい一杯あるのに、体が気持ちについていけない」と、残念そうにおっしゃっていた。

昨年初夏に、「今年の夏は調子よく過ごせそうです」というお葉書を頂戴し喜んでいたのに、秋からはもう先生が楽しみにしておられたゼミの授業にお見えになることができなかった。後に残られた奥様、お子様、そしてお母様の悲しみと残念なお気持ちとは、察するに余りある。そして私達もまた、西村先生がご自分の生き方で身を以て示して下さい道、できる限り歩み続けたいと願うのみである。

最後にあらためて、西村晃先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

近代の終焉

和田洋一先生をおもう

笠原芳光

(京都精華大学人文学部教授)

あれはたしか一九九二年の五月二十五日だった。この日が和田洋一先生にお目にかかった最後である。せめてもう一度、お会いしたかったと今にしておもう。

和田先生から話したいことがあるからきてほしいと言われて、下鴨のお宅に参上したが、いきなり「最近、赤岩栄の『キリスト教脱出記』を読んだ」とおっしゃる。三十年前の本である。

よろず、このように最新流行を追わないのが先生の流儀である。それにしても遅すぎると思いつつ、「すこしは共感するところがありましたか」と尋ねると、「全面的に賛成だ」。

さらに「この頃は教会に行っていません」

父君以来、幼少からのキリスト者、それも元日本基督教会系の教会で、永年にわたって長老を務めてこられた先生である。なにか心に期するものがありになる様子だった。

「たとえ言にくいことでも、はつきり書いておかなければと思うので」。先生は自伝『わたしの始末書』の続篇を執筆中であり、戦後の同志社のことをおもに書かれることになっていた。そのために会いたいと言われたのだと思つたが、こんな話題から始つたのはい

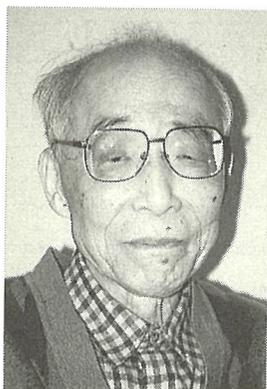
ささかおどろいた。

さきの本は著者がキリスト教の教義や儀礼や教団組織に疑問をもち、キリスト教を脱出して、キリストとされる以前のイエスに迫ろうとした書で、キリスト教ではなく「イエスのヒューマニズム」というべきものを結論としている。しかし、そのあと著者自身、この表現には不満で、書き直したいと言いつながら亡くなったという経緯がある。

ヒューマニズムは近代のもつとも重要な思想である。だが近代が終りつつある現代には魅力に乏しい思想になつてきている。先年、ミシェル・フーコーは『言葉と物』のなかで、ヒューマニズムは安易な幻想だ、人間というものには二百年もたつていない一形象に過ぎないとのべて、われわれをおどろかせた。

よく考えてみればヒューマニズムは近代初期の鮮烈を失い、常識となり、いまや無力に墮している。だが、それに代わる新しい思想は容易に見いだせないのである。

和田先生は近代人である。明治後期から九十年の日本近代を生きてこられた人である。先生は幼少期以来、プロテスタントイズムという近代的なキリスト教を身につけてこれ



●和田洋一氏略歴●

- 1903年9月22日 生まれ
1930年3月 京都帝国大学文学部卒業
1946年4月 同志社大学予科教授
1948年4月 同志社大学教養学部教授
1949年8月 同志社大学文学部教授
この間、大学研究所長、文学部長、商業高等学校長を歴任
1974年3月 定年退職
1974年4月 同志社大学名誉教授の称号を受く
1993年12月20日 2時50分 永眠 90歳

た。

さらに、青年期からはもう一つの近代思想である社会主義に共鳴された。そのためにかつての国家主義の時代には治安維持法違反容疑で捕えられるという経験までされた。

しかし、もともと絶対的な思想であるキリスト教のドグマやマルクス主義のイデオロギ―は先生の性にあわないものではなかったか。

近年に至るまでヒューマニスティックな人権論者で革新勢力の大同を念願してこられたことも、そのあらわれであろう。多くの人が、そのオペティミズムと時代遅れに気づいたあとも立場を変えられなかつたけれど、最近になってようやく、そこから脱せられた。といつてもリベラリストとして、あらゆる権力的なものに対する抵抗の精神は最後まで持続されたといつてよい。

またキリスト教は先生の身についていた、いわば身体的理念ではあったが、はたして魂の深奥の問題であったかどうか、晩年、みずから疑問を抱いておられたようである。一九九一年の正月にいただいた年賀状が手許にある。

「ぼくはキリスト教を選びとつたわけでは

ない。ぼくの生まれ育つた環境が、キリスト教によって十重二十重にとりまかれていような環境であつたために、キリスト教が身につけてしまつたけれど、ぼくはどうも宗教的な人間ではない。八十歳代の後半になつてそんなことを考えています」

先生は自己に正直な、純真人である。たいていの者は妥協し曖昧のなかに埋もれてしまふであろう年齢に達して、なおこのような懐疑を覚え、それを告白されるのだから。

先生は永遠の求道者である。そして求道者と信仰者は形式的に区別し、差別されるべきものではない。いみじくも宮澤賢治は「農民芸術概論綱要」のなかで、「求道すでに道である」と言っているではないか。九十年の生涯のはてにおとずれた、この錯迷はまことに尊いものがあるといわねばなるまい。

和田洋一先生の死はながいながい近代の終焉の表徴でもあろうか。このあとをいかに生きるか。それはわれわれが自らに問わなければならない難問である。